

# キチガイ地獄

夢野久作



……やッ……院長さんですか。どうもお邪魔します。

ええ。早速ですが私の精神状態も、御蔭様でヤット回復致しましたから、今日限り退院さして頂こうと思ひまして、実は御相談に参りました次第ですが……どうも永々御厄介に相成りまして、何とも御礼の申上げようがありません。……ええ。それから入院料の方は、自宅へ帰りましてから早速、お届けする事に致したいと思ひますが……。

……ハハア……いかにも。なるほど。事情をお聞きにならない事には、退院させる訳には行かぬと仰有るのでね。イヤ。重々御尤もです。それでは事情を一通りお話し致しますが……しかし他人へお洩らしになつては困りますよ。何しろ私の生命にかかわる重大問題ですからね……。

ナル……成る程。患者の秘密を一々ほかへ洩らしたら、医者  
者の商売は成り立たない。特に病院というものは、世間の秘  
密の保管倉庫みたようなもの……イヤ。御信用申上げます。  
御信用申上るどころではありません。

それでは事実を打ち割つて告白致しますが、何を隠しましよ  
う、私は殺人犯の前科者です。破獄逃亡の大罪人です。婦女  
を誘拐ゆうかいした愚劣漢であると同時に、二重結婚までした破廉恥はれんち  
極まる人非人……。

イヤ。お笑いになつては困ります。そんな風にお考え下さ  
るのは重々感謝に堪えない次第ですが、しかし事実を枉まげる  
事は断然出来ませぬ。御承知の通り現在、只今の私は、北海道  
の炭坑王と呼ばれていた谷山家の養嗣子ようしし、秀磨ひでまろと認められて  
いる身の上ですからね。私の実家も、定めし立派な身分家柄

の者であろうと、十人が十人思っておられるのは、むしろ当然の事かも知れませんが、遺憾ながら事實は丸で正反対……と申上げたいのですが、実はもつとヒドイのです。その証拠に、私が谷山家に入込みました直前の状態を告白致しましたら、誰でも開いた口が塞がらないでしょう。

私は大正×年の夏の初めに、原因不明の仮死状態に陥つたまま、北海道は石狩川の上流から、大雨に流されて来た、一個のルンペン屍体したいに過ぎなかつたのです……しかも頭髮や鬚を、蓬々ぼうぼうと生はやした原始人そのままの丸裸体まるはだかで、岩石の擦り傷こすや、川魚の突つき傷を、全身一面に浮き上らせたまま、エサウシ山下の絶勝に臨む、炭坑王谷山家の、豪華を極めた別荘の裏手に流れ着いて、そこに滞在していた小樽タイムスの記者、某ぼうの介抱を受けているうちに、ヤット息を吹き返した

無名の一青年に過ぎなかつたのです。

イヤ。お待ち下さい。お笑いになるのは重々御尤ごもつともです。話が日々脱線し過ぎておりますからね……のみならずこの話は、谷山家の内輪うちわでも絶対の秘密になっておりますので、御存じの無いのは御尤も千万ですが、しかし私は天地神明に誓つてもいい事実ばかりを、申上げているのです。イヤ。まつたくの話です。そればかりじゃありません。只今から告白致します私の身の上話を、冷静な第三者の立場からお聴きになりましたら、それこそモットモット非常識を極めた事実が、まだまだドレくらい飛び出して来るかわからないのです。……ですから、そんなのを一々御心配下すつたら、折角の告白がテンキリ型なしになってしまうのですが、しかし同時に、それがホントウに意外千萬な、奇怪極まる事実であればあるだ

け、それだけ谷山家の固い秘密として、今日まで絶対に外へ洩れなかったもの……という事実だけはドウカお認めを願いたいと思うのです。殊に内地と違いました未開野蛮な……むしろ神秘的な処の多い北海道の出来事ですからね。その辺のところを十分に御斟酌しんしゃく下すつて、お聴き取りを願いましたならば、このお話がヨタか、ヨタでないか……精神病患者のヌバラシイ幻想イリュウジョンか、それとも正気の間人が告白する、明確な事実ものがたり譚かということは、話の進行に連れて、追々おいおいとおわかりになる事と思いますからね。

……とこゝろです。その小樽タイムスの記者某と、近隣の医師の介抱によりまして、ヤット仮死状態から蘇生しました私は、どうした原因かわかりませんが、自分自身の過去に関する記憶を、完全に喪失しておりましたのです。もつともその

当時は、私の頭にヒドイ打撲傷が残っておりましてので、多分、どこか高い処から落つこつて、頭を打った瞬間に、ソナ変テコな状態に陥つたものじゃなかったかと、今でも思っている次第ですが……しかしコンナ实例は、先生の方が失礼ながら、お詳しい事と存じますが……。

……ハハア。そんな实例を見た事は無いが、話にはよく出て来る。真面目な事実として在り得るかも知れない……成る程。とにかくそれから後のちというものは、その記者某から指導されるまにまに、自分自身の過去を、すっかりカモフラージュしておりました……。

……自分は九州佐賀の生れで、親も兄弟も無い孤児である。むろん学問という学問もしていないが、最近、東京で事業に失敗して、この世を悲観した結果、人跡未踏の北海道の山奥



で自殺して、死骸を熊か鷲の餌食えじきにするつもりで、山又山を無茶苦茶に分け登って行くうちに、過あやまつて石狩川に陥入ったもの……。

とか何とかいったような出鱈目でたらめで、別荘附近の人々を胡魔化ごまかしてしまいました。それから伸び放題になつていた頭をハイカラに手入れして、見違えるようなシヤンに生れ変わりましたが、併しソナナ風にして生れ変わりは変つたものの、モトモト行く先も帰る先も無い、風来坊の身の上でしたから仕方がありません。その記者が寝間着ねまきにしていた古浴衣を貰い受けまして、その別荘の御厄介になりながら、毎日毎日ボンヤリしていた訳でしたが……。

……エツその新聞記者の名前ですか。

……ええつと……。オヤッ。おかしいな……。何とかいっ

たっけが……ツイ今サツキまでハツキリと記憶おぼえていたんですが。……オカシイナ……ツイ胸どうわす忘れしちやつてチョット思いい出せないんですが。エッ。何ですつて……。

生命いのちの親様の名前を忘れるなんて、言語道断だと仰おっしや有るの  
ですか……ト……飛んでもない。アンナ奴いのちが生命の親様なら、  
猫イラズは長生ながいきの妙薬でしょう。

私が前に申しましたような、容易ならぬ大罪人の前科者という事実を、早くもその時に看破するや否や、一種の猟奇趣味の満足のためとしか思えない、極めて残忍な方法でもって、私の運命を手玉に取るべく、ソロソロと手を伸ばしかけていた悪魔というのは、誰でもない。その生命いのちの親様だったので。谷山家の獅子身中の虫となつて、私を半狂人はんきちがひになるまで苦しめ抜く計画を、冷静にめぐらしていたケダモノが、その

新聞記者だったのです。……ええ……そうですね。それじゃソイツの名前を思い出すまで仮りにAとでも名付けて、お話を進めておきますかね。

何でもそのAという男は、谷山家の内情に精通している、お出入り同様の新聞記者で、熊狩や、スケートの名人だと自称していましたが、それは恐らく事実だったのでしょう。体格のいい、色の黒い、眼の光りの鋭い、如何いかにも新聞記者らしいツンとした男でしたがね。そんな風にして私を、谷山家の別荘に引止めながら、色んな事を質問したり、話しかけたりして、私の記憶を回復させよう回復させようと努力していたようです。

ええ。もちろんそうですとも。とりあえず私の記憶を回復させた上で、素晴らしい新聞種を絞り出してくれようと思っ

ていたに違い無いのですが、生憎あいにくなことにその結果は、全然、徒勞に帰してしまいました。私の脳髓から蒸発してしまった過去の記憶は、モウ疾とつくにシリウス星座あたりへ逃げ去つていたのでしよう。それから後のち、容易な事では帰つて来なかつたのですが……。

もつともその時に万一、私が過去の経歴を思い出していたら、話はソレツ切りで、目出度めでたし目出度しになつていたかも知れません。アンナ空恐ろしい思いをさせられないまま、音も香かもなく土になつてしまつたかも知れないのですがね……。

それから約二週間ばかり経つた、或る暑い日のことでした。炭坑王、谷山家の一粒種の女主人公で、両親も兄弟も無い有名な我儘者わがままもので、同時に小樽から函館へかけた、社交界の女王と

呼ばれていた、龍代さんたつよと称する二十三歳になる令嬢が、小母さんと称する、中年の婦人を二三人お供に連れて、愛別から出来た新道をドライブしながら、突然に、エサウシ山下の別荘へ遣つて来たのです。そうして私は間もなく、その令嬢のお眼に止まる事になつたのです……ええ。そうなんです……お話のテムポが非常に早いようですが、事実ですから致し方があります。尤も後から聞いてみますと、その我儘女王の龍代さんは、小樽の本宅に廻つて来たA記者の報告によつて、私の事を承知するや否いなや、たまらない好奇心に馳かられたらしく、何も彼も放ほつたらかして、私を見に来たものだそうです。しかも来て見るや否いなやタツタ一眼で、氏うぢも素性も知れない風来坊の私を捉まえて、死んでも離さない決心をしたといふのですから、その我儘はなはださ加減が如何に甚はなはだしいものがあつた

かが、アラカタお察し出来るでしょう。

……どうも惚けのろを申上るようで恐れ入りますが……しかし  
又一方に、私も私です。只今申しました通りに過去の記憶を  
喪失なくしていることをハッキリ自覚していたんですから、万一、  
ズット以前に約束した女が居はしなかったか……ぐらいの事  
は、その時にチョット考えてみる必要があつたかも知れない  
のですが、ミジンもそんな事に気が付かずに……むろん私共  
の背後うしろで、Aが赤い舌を出していようなぞとは夢にも気付か  
ないまま、妖艶澁刺ようえんはつらつを極めた龍代の女王ぶりに、魂を奪われ  
てばかりおりましたのは、何といつても一生の不覚でした。  
或はこれが運命というものだったかも知れませんがね。……  
ハハハ……。……。

その結果は、改めてお話する迄もなく、世間周知の事実で

すから略させて頂きます。ただ私はその龍代の超特級な我儘と、A記者の不思議なほど熱心な仲介に依りまして、谷山家の養子に納まる事になりますと、何よりも先に驚かされた事実が三つありました事を、念のため申上げておきましょう。

その第一というのは、さしもに北海道切つての放埒者ほうらつものと呼ばれていた龍代が、意外にも処女であつた事です。それから第二はやはりその龍代の性格が、結婚後になると急に一変して、極めて温良貞淑な、内気者に生れかわつてしまつたことです。

それから今一つは少々さもないお話ですが、流石さすがの炭坑王、谷山家の財政が、その当時の炭界不況と、支配人の不正行為のために、殆んど危機に瀕ひんする打撃を受けていたことでした。……ですから詰るところ私は、龍代に見込まれたお蔭で、

泰平無事の風来坊から一躍して、引くに引かれぬ愛慾と、黄金の地獄のマン中に、真逆まっさかさま様に突き落された訳で……しかもそれは私のような馬鹿を探し出すために、心にも無い放埒振りを見せていた龍代の大芝居に、マンマと首尾よく引掛けた物……という事が結婚後、半年も経たないうちに判明して来たのです。

しかし一方に私も今更、そうした二重の地獄から逃げ出すような、臆病者ではありませんでした。この点でもやはり龍代の見込みが百パーセントに的中していたのかも知れませんが、元来、風来坊の川流れであつた私が、それから後のちというもの、龍代にも負けないくらい性格の一変ぶりを見せましたもので、どこで得た知識かわかりませんが、自分でも驚くほどの才能を發揮し初めたものです。



何よりも先に、今申しました悪支配人をタタキ出して、危機に瀕した谷山家の財政をドシドシ整理して行く片手間に、その当時まで誰も着眼していなかった、鯁にしんの倉庫業に成功し、谷山くんせいにしん燠製鯁の販路を固めて、見る見るうちに同家万代の基礎を築き初めましたので、谷山一家の私に対する信頼は弥いが上にも高まるばかり……そういう私も時折りは、吾れながらの幸福感に陶醉しいしい、モットモット優越した将来の夢を、妻の龍代と語らい誓った事もありました。

併しかし今から考えますと、ソウした幸福感はホンノ束つかの間のことだつたのです。私の一身に絡からまる怪奇な因縁は、中々ソレ位の事で終結おしまにはなりませんでした。

それは私共の間に、長男の龍太郎が生れてから、一年と経たない中うちの事でした。

妻の龍代が突然に……それこそホントウに突然に、カルモ  
チン自殺を遂げてしまったのです。同時にその遺書かきおきによつて、  
谷山家の内輪の人々が何故なにゆえに永い間、龍代の放埒と我儘を見て  
見ない振りをしていたか……のみならずどこの馬の骨か、牛  
の糞くそかわからない風来坊の川流れを、よく調べもせず炭坑  
王後継者として承認したか……という理由がハッキリ判明わかつ  
たのですが……斯様かよう申しましたら先生は、もうアラカタ事情  
をお察しになつてゐるでしょう。

谷山家は、容易に他家と婚姻出来ない、忌いまわしい病気を  
遺伝した家柄なのでした。そうしてその血統と、財産とが、  
同時に絶滅しかけていたところを、私のお蔭で辛うじて、繫つな  
ぎ止めたという状態なのでした。

ところがその危なっかしい血統が、龍太郎の誕生によつて

ヤツト繋ぎ止められたと思う間もなく、龍代自身の肉体に、早くもその忌まわしい遺伝病の前兆が、あらわれ初めたことがわかりましたので、まことに申訳無いが貴方に……つまり私にですね……情ない姿をお見せしないうちにお別れする決心をしました。これが妾の最後の我儘ですから、何卒おゆるし下さい。……妾は貴方を欺すまいとした妾のまごころを、欺し得ないで貴方と結婚しました。その深い罪のお詫びは、たとえ仮令、この儂ない玉の緒が絶えましてもキットお側に付添うて致します。……お別れしたくない……子供の事を呉々もお願いします。妾のまごころをタツタ一人信じて下さる貴方のお心に、おす縋りして死んで行きます。今はただ天道様の無情を怨むばかり……といったような、それはそれは哀切を極めたものでしたが、その文句には全く泣かされましたよ。ハハ

イ。昔の我儘はアトカタもない。……透きとおるほどの純情と、理智とに責められた……弱々しさと美しさとに満ち満ちた……ハハイ……。

むろんその時も私は、谷山家を出る考えなんか毛頭もうとうありませんでした。ハイ。世の中の事はすべて運命ですからね。

しかし谷山家の連中はその時に、トテモ狼狽わうたいしたらしいのです。何しろ、一生懸命になって秘し匿かくしていた、谷山家の忌いまわしい血統が、龍代の自殺をキツカケにして、世間に暴露しそうになったのですからね。警察と新聞社に頼み込んで極力、事情を秘密にしてもらおう一方に、今となって私に逃げられ  
ては一大事と思つたのでしよう。出来るだけ早く、私の氣に入るような後妻を探してやらなければ……といったような話が、まだ龍代の百ヶ日も済まないうちから、谷山家の内輪で

真剣に進められる事になりました。つまりそんな連中の私に  
対する信頼が、イヨイヨ明日に裏書きされる段取りになつて  
来た訳ですが、サテそれでは誰がいいか、彼がいいか……と  
いった具体的なところまで話が進んで参りますと、不思議な  
事に、私の気がドウしても進まなくなつて終しまつたのです。前  
に龍代と一所になつた時分とは、何だか気持が違ふように思  
われて来たのです。しかもそればかりでなく、そうした気持  
を自分自身でよくよく解剖してみますと、それは死んだ龍代  
に気兼ねをした気持でもなければ、子供の将来を心配した訳  
でもないように思われるのです。なぜ気が進まないのか、自  
分でも判然はつきりしないままに、何だか恐ろしく気が咎とがめるよう  
な……何かしら大切な事を忘れているのを、ヤット思い出し  
かけているような気がしてなりませんので、実際、吾れながら

妙チキリンな自烈度じれつたい気持になつてしまつたものです。ですから私は親類達への返事をいい加減にして突然、旅行に出かけたり何かしながら、色々、その理由を考え廻してみたものですが、解らないものはイクラ考へたつて解る筈がありません。のみならず、その結果スツカリ憂鬱ゆううつになつてしまつた私は、トウトウ皆をビックリさせるような事を仕出来しでかしてしまひました。……つまり何となく石狩川の上流に行つてみたい。どこだかわからないが自分の故郷は、石狩川の上流に在るような気がするから、そこに行つてみたら、何もかも解るに違い無い……といったような、タマラない悲壯な気持になりましたので、人知れず小型のキャンバスボートや、食料などを買込みまして、無断で家を飛出しますと、一直線にエサウシの別荘に向つたものです。すると又、生憎あいにくなことに、ズツ

ト以前から、私のそうした素振りを不審に思つて、気を付けていた者が、家うちの中に居りましたので、難なく途中で押えられて、小樽へ引戻されてしまったものですが……しかし先生はモウ疾とつくに、私のそうした気持を察しておいでになるでしょう。……ねえ先生。先生はソナ病症の経過をイクラでも御存じでしょう。そうした不可思議極まる潜在意識の作用を、知り尽しておいでになるでしょう。

ハハア。西洋の古い記録にはそうした実例が出ているが、先生御自身にはソナ患者を御覧になつた事が無い……それはいい都合です。私はソナ実例の中でも特別詭あつらえの標本ですからね。

何を隠しましょう、今朝けさの事です。しかもタツタ今の出来事です。私は病室の床の上にこぼれていた茶粕の上で、ウツカ

り足を踏み<sup>すべ</sup>込らして、ヒドク尻餅を突いたのですが、そのトタ  
ンに、トテモ素晴らしい大事件が持上ったのです。永い間忘  
れていた過去の記憶……石狩川に陥ち込んだ以前の、身の毛  
も竦<sup>よだ</sup>立つ記憶の数々が、一ペンにズラリツと頭の中で蘇<sup>よみがえ</sup>って  
しまったのです。同時にモウこれで私は、自分の頭の故障か  
ら完全に解放された……と気が付きましたので、早速ながら  
こうして、退院のお許しを受けに参りました次第ですが……。

ハイ……実を申しますと、この秘密をお話するのは、私  
にとつて身を切られるよりも辛いのです。むろん社会的にも、  
モノスゴイ反響を喚<sup>よびおこ</sup>起すに違いない重大事件ですから、万一、  
公表でもされますと、私を中心とする一切合財が、破滅に陥  
るかも知れないと思われるのですが、しかし私自身の一生涯  
が、この病院の中<sup>うち</sup>で埋れ木になるか、ならないかの境い目と



思いますから、背に腹は換えられない気持ちで、先生にだけソツとお打明けする次第ですが……ハハイ……ハイ。

先生はズツト前に、誰からか、コンナ話をお聞きになった事がありましたよ。

北海道は石狩川の上流、山又山のその又奥の奥山に、一軒の原始的な小舎こやが建っているのが見える。その家は北面の背後を、旭岳に続く峨々がたる山脈に囲こまれている一方に、前面は切立ったような、石狩本流の絶壁たきえきに遮さられていて、人間業わざでは容易に近付けない位置に在るので、ツイこの頃まで、誰にも発見されないままになっていたものらしい。

ところが最近に到って、北海道特有の葉草採りとが、霧に出会って山道に踏み迷った結果、偶然に、遠くからこの一軒屋を発見してからというもの、急に評判が高くなって、北海道

中に拵がつてしまった。……その一軒家は、まだ誰も知らないアイヌ部落の離れ小舎こやだろうと云う者が居る。一方に、それは北海道名物の、監獄部屋から脱出した人間が、復讐しかえしを恐れて隠れているのだ……といったような穿うがつた説が出るかと思うと、イヤそうではあるまい。ことによるとそれは、太古以来生き残っている原人の棲家すみかかも知れない……なぞと云い出す凝り屋こやも居る。そうかと思うと……ナアニそれは葉草採りが見当違いをしたんだ。大方北見境きたみかいに居る獵師の家を遠くから見たんだろう……なぞと茶化ちやかしてしまう者も居る……といつた塩梅あんばいで、サツパリ要領を得ないままに、噂ばかりがヤタラに高まつて行つた。

そのうちにその評判が、トウトウ新聞社の耳みみに這入はいると、イヨイヨ騒ぎが大きくなつてしまつた。結局Aが奉公してい

た小樽タイムスの政敵、函館時報社の飛行機で撮影された、その家の鳥瞰ちようかん写真が、紙面一パイに掲載されることになったが、その写真をよく見ると、それは明らかに日本人が建てたらしい草葺くわぶき小舎で、外国映画に出て来る丸太小舎ロツグケヒン式の恰好をしているばかりでなく、純日本式の野菜畑や、西洋式の放射状の花畑などが、ハッキリと映っているところを見ると、皆の想像とは全然違った文化人の住居すまいに違いない。しかも、それでいてその位置はというと、確かに、北海道の脊梁山脈せきりょうの中でも、人跡未踏の神秘境に相違ないのだから、その一軒家なんびとが何人の住家であろうかは、容易に推測されない訳である。奇怪……不思議……といったような事実が、同乗の記者によつて詳細に報道された。そうしてそのまま猟奇りようきの輩ともがらの口端くちはに上つて、色々な臆説の種になつていゝるばかりである……という事

実を、先生は多分、何かの雑誌か、新聞で御覧になった事でしょう。ハハア。まだ御覧にならない……。御研究がお忙しいのでね。成る程……。それでは致し方がありませんが、何を隠しましょう、その一軒屋こそ、私が建てた愛の巣なのです。私が妻子と一所に、楽しい自給自足の生活を営んでいた、第二の故郷に相違ないのです。……イヤどうも……。御免下さい。どうも胸が一パイになりました……。ハハイ……。ハハイ……。私は石狩本流の絶壁から墜落したトタンに、そうした記憶をスツカリ喪うしなつていたのです。ええええ。事実ですとも事実ですとも……。

私の戸籍が偽物であることは、私の生れ故郷の村役場に御照会下されば一目瞭然することです。その戸籍面を偽造して、私を初め谷山一家の人々を欺いていたのが、誰でもない、新

聞記者のAだったのですからね。

私が二度目の結婚問題に差し迫られたまま、旅行にカコ付けて家を飛び出したのも、かつは誰にも知れないようにAに面会してみたかったからでした。Aはその頃、小樽タイムスを罷めて、九州地方をウロ付いているという噂でしたからね。何かしら私の過去に就いて、探りに行ったのじゃないか……といったような気がしたからです。それから二度目に、モウ一度家を脱け出した時も、そうした潜在意識に支配されていたのでしよう。何となく石狩の上流に行ってみたい。そうした何もかもわかるに違い無い……といったような気持になったからでした。

併し、最早そんな無駄骨折をする必要は無くなりました。

私が完全に過去の記憶を回復しているのですからね……同時

に、そのお蔭で、谷山家の養子事件を裏面からアヤツリ廻して来た、冷血残忍なAの手の動きを、ハッキリと見透かしながら、お話する事が出来るのですからね……。

私は福岡県朝倉郡の造酒屋、畑中正作はたなかしょうさくの三男で、昌夫と呼  
ばれていた者です。父の持山に葡萄ぶどうを栽培するのが目的で、  
駒場の農科大学に入学して、卒業間際になつていた者ですが、  
九州人の特徴として、器量も無い癖に政治問題の研究に没頭  
した結果、当時の大政党憲友会の暴状に憤慨し、同会総裁、  
兼、首相であつた白原圭吾氏しろはらけいごを暗殺して終身懲役に処せられ、  
北海道樺戸かほとの監獄に送られて間なく脱獄し、爾来じらい、杳ようとして  
消息を絶つていた者……と申しましたら、その他の細かい履  
歴は申上げずとも宜よろしいでしょう。暗殺、逮捕、脱獄の前後  
を通じて、全国の新聞紙に仰々しく掲載されていたものです

からね……。

しかしその中<sup>うち</sup>に唯一つ、私の脱獄の理由として新聞紙上に伝えられていたものが皆、飛んでもない間違いばかりであった事は、誰も気付かないでいるでしょう。再度の暗殺決行とか、社会主義的潜行運動のためとか、又は露西亞<sup>ロシア</sup>への逃亡のためとかいったような風説<sup>ふうせつ</sup>が皆、御念の入った当てズツポ一ばかりで、天下を聳動<sup>しょうどう</sup>した私の脱獄の動機なるものが、実は他愛もないモノであつた事を知っている人間は、そう沢山には居ない筈です。

私が樺戸に落付いてから間もなくの事でした。東京で恋の真似事をしておりました女給<sup>とよめだ</sup>の軻岐久美子<sup>とよめ</sup>というのが、遙々、北海道まで尋ねて来て、思いがけなく面会に来てくれたのです。

この事實は間もなく新聞紙上に伝えられまして、活動写真にまで仕組まれたそうですから、御存じの方もありませんが、何を隠しましょう。私はその時に、彼女から受けました巧妙な暗示と、係官に怨恨うらみを抱いておりました同囚の者の同情とに依りまして、何の苦もなく脱獄を執行する事が出来たのです。……しかもその脱獄の方法というのが、特に私の生命に拘かかわる重大問題でありまして、同時に同囚の恩人たちにも、非常に迷惑のかかる話ですから、こればかりはこの口を引裂かれてもお話出来ないのです。……が……ともかくもそのような事情で、首尾よく逮捕の手をのがれました私は、彼女と共に石狩川の下流を越えまして、例の絶対安全の神秘境に恋の巢を営むことになったのです。

もつともコンナ風に話して参りますと、何のことはないお



とぎばなし  
伽話みたような筋道になつてしまいましたが、併し、そこまで  
来る間の私共の辛苦艱難かんなんと、それから後の孤軍奮闘のち的生活と  
いったら、優まさにロビンソン・クルーソー以上の奇談を綴るに  
足るものがあつたのですよ。

私は樺戸を脱出するとそのまま、持つて生れた健脚を利用  
して、山又山を逃げ廻りながら、一心に久美子の行衛ゆくえを探索し  
初めたものです。無論囚人服を着たままですから、夜しか人  
里に出られなかつた訳でしたが、私は盗みというものを絶対  
にしない方針でしたので、どこまでも青いお仕着しきせ姿で、鳥  
獣と同じ生活をして行かなければなりません。ですから、  
ら、その最初の間の苦しみというものは、実に想像の外でし  
たが、併し又一方から申しますと、そうした辛棒のお蔭で、私  
の逃げ足が絶対にわからなかつたのですから、詰るところ差

引の損得は無かつたかも知れません。のみならずその辛棒の甲斐かいがありまして、脱獄してから一個月目に、新旭川附近の只とある村外れで、彼女が私に暗示していた、小さな奇術劇団の辻ビラがブラ下っているのを発見しました時の、私の喜びはドンナでしたらう。忽ちたちま勇氣を百倍しました私は、アラユル危険を物ともせず、折からの暗夜やみよに紛まぎれて、旭川の町にかかっているその劇団に付き纏まとうたものでしたが、そのうちに、トウトウ彼女と連絡を取ることに成功しますと私は、迅速に手筈をきめまして、一気に彼女を引っぱり出してしまつたのです。

その時に生命いのちと頼むものは、大急ぎで彼女に買集めさせた一挺の鋏くわと、一本の洋刀ナイフと、リュックサックに詰めた二つの鍋と、六貫目ばかりの食料だけでした。その以外には何の準

備も出来ない囚人服のまま、舞台裏から飛出して来たばかりの、金ピカ洋装の彼女と手に手を取って、涯はてしない原始林の奥を目がけて、盲滅法めくらめつぽうに突進したのですからね。恋は盲目と申しますが、これくらい思い切った盲目ぶりはチョットほかに類が無いでしょう。

しかもその途中では、深山幽谷に慣れた藁草採りでも震え戦おのく、寒い寒い霧に包まれて、二日二晩も絶食したまま、土の中に穴を掘って潜り込んだり、又は背丈よりも高い灌木林を、一反歩以上も掻き散らして、木の根を掘った餓え熊の爪の跡を見て、モウ運の尽きだと諦めて、二人で抱き合って泣き出したり、それはそれは喜劇とも悲劇とも付かない情ない目や、恐ろしい目に何度会ったものかわかりません。

ところでそのような次第で、木の実かや櫃かやの実を拾いながらヤツ

トのことで、念がけていた人跡未踏の山奥に到着しますと、私は辛苦艱難をして持つて来た鋤と、ナイフで木を伐り倒して、頑丈な掘立て小舎を造り、畠を耕して自給自足の生活を初めると同時に、小川の魚を釣つて干物にしたり、木の実を煮て苞つとに入れたりして、冬籠ふゆじもりの準備を初めました。

二人はそこで初めて、この上もなく自由な、原始生活の樂しさを悟つたのです。科学、法律、道德といったような八釜やかましい条件に縛られながら生きている事を、文化人の自覚とか何とか錯覚している馬鹿どもの世界には、夢にも帰りたくなつたのです。

二人は約束しました。……二人はこれから後のちイクラ子供が出来ても、年を老とつても、モウ人間世界へは帰るまい。アダムとイブが子孫を地上に繁殖させたようにして、吾々の子孫

をこの神秘境に限りなく繁殖させよう。自然のままの文化部落を作らせよう……と……。

彼女はそれから年児としごを生みました。私が二十一の年から二十五までの間に、男の児と女の児を二人宛ずつ、都合四人の子供を生みましたが皆、病氣一つせず成長しましたので、山の中が次第に賑にぎやかになつて参りました。

ところが忘れもしませんその二十五の夏の事でした。最前お話しました新聞社の飛行機が、突然に私の家うちの上を横切りましたのは……。

その時の子供たちの脅おびえようといつたらありませんでした。ちようど私は家の前うちの草原くさはらに、放射状の花壇を作つて、山から採つて来た高山植物を植えかけておりましたが、思いがけない西北の方角から、遠雷のような物音が近付いて来ますと、

踊るような恰好をして逃げ迷っている子供等と一所に、慌てて家の中へ逃げ込んだものです。そうして軒下のきしたに積んだ寢床用の枯草の中から、青い青い石狩岳の上空に消え失せて行く機影を見送っているうちに何か知らタマラない不吉な予感に襲われましたので、ホーツと溜息を吐ついておきますと、その背後から久美子もソツと不安気な顔をさし出して、

「わたし妾達を探しに来たのじゃないでしょうか」

と云ったものです。それを聞くと私は、思わずドキンとしました。しかし顔ではサリ気なく微笑しました。

「ナアニ。俺たちみたような人間を探すのに、ワザワザあんな大袈裟な事をするもんか。しかも今頃になって……ハハハ……」

と打消すには打消したものの、それでも押え切れない不吉

な胸騒ぎをドウする事も出来ないまま、立ち竦すくんでいたことでした。

私はそれから後のち、四五日の間というものの、ドウしても遠くに出歩であるく気がしなかつたものです。むろん写真まで撮られていようなぞいう事は、夢にも気付きませんでしたので、ただ、私共の居る神秘境をダシヌケに掻かき乱して行つた巨鳥の姿を、思い出しては溜め息いしい、家うちの周囲の島ばかりをいじくつていたものですが、そのうちに又、眼の前に差迫つている冬籠ふゆごもりの用意の事を思出しますと、何がなしにジツとしては居られなくなりましたので、お天気の良いのを幸いに、手製のタマ網を引つ担かついで、鱒ますをすくひに出かけました。

久美子はその時にも、不安そうな顔をして私を引止めましたが、矢張やはり虫が知らせたとでも申しませうか。それを振

り切つて山を下りまして、紅山桜や、桂の叢林を分けながら、屏風を切り立つたような石狩本流の崖の上まで来ますと、生木の皮で作つた丈夫な綱をブラ下げまして、下の石原に降り立つて、岩の間の淀みに迷う鱒や小魚を、掬い上げ掬い上げしております。

すると……どうでしょう。まだホンの五六匹しか掬い上げていないと思ううちに、ツイ向うの川隈の岩壁の蔭から、中折帽を眉深に冠つた洋装の青年が、曇みボートを引っぱりながら、ヒョックリと顔を突き出したではありませんか……。

……私はその青年と暫くの間、顔を見交したまま立ち竦んでいたようです。しかしその中に電光のように……これはいけない……と気が付きますと、大切なタマ綱を腰巻の紐に挿すや否や、崖にブラ下がっていた綱に飛付いて、一生懸命に



攀<sup>よ</sup>じ登り初めました……が……しかしモウ間に合いませんでした。まだ半分も登り切らないうちに、思いがけない烈しい銃声が二三発、峡谷の間に反響して、私の縫<sup>すが</sup>つていた綱が中途からプツリと撃ち切られました……と思うと、一旦、岩の上に墜落しました私は、心神喪失の仮死状態に陥ったまま、苔<sup>こけ</sup>だらけの岩の斜面を、急流の中へ<sup>すべ</sup>り落ちて、そのまま見えなくなってしまうものだそうです。

この時に私を撃ち落した洋装の青年が、最前お話ししました新聞記者のAであったことは、申すまでもありません。同時に、この時に響いた二三発の銃声こそはAが私の運命を手玉に取り初めた、その皮切りの第一着手であったことも、トックにお察しが着いていることでしょう。

但<sup>ただし</sup>……ここでチョットお断りしておきたいのは、この時ま

でAが、私に対して、別段に、深刻な野心を持っていなかつた事です。むしろAは私という奇妙な人間を発見して、タマラナイ好奇心を挑発されて行くうちに、いつの間にか悪魔的な、残虐趣味の世界へ誘い込まれて行ったもの……と考えてやつた方が早わかりする事です。

手早く申しますとAは、新聞記者一流の功名心に駆られた結果、夏の休暇を利用して、旭岳の麓の一軒屋の怪奇を探りに来た人間に過ぎなかつたのです。……政敵、函館時報社の飛行機に先鞭せんべんを付けられて、地団太じだんたを踏んでいた小樽タイムス社と、その後援者ともいふべき谷山家の援助を受けまして、たみ暈ボートと、食糧と、それから腕におぼえのある熊狩用の五連発旋条銃ライフルを担かつぎながら、深淵しんえんと、急潭きゅうたんとの千変万化を極めた石狩川を遡さかのぼつて来た訳でしたが、幸運にもその一軒家の主

人公らしい怪人物を発見すると間もなく、取り逃がしそうになりましたので、思い切つて私を威嚇すべく、頭の上を狙つて二三発、実弾を発射したものに過ぎませんでした。

ですからAが、その時にドレくらい狼狽致したかは、御想像に難くないでしょう。すぐに畳ボートを押し出して、危険を犯しながら激流の中を探しまわりました、そのうちに、どうしても私の死骸が見付からない事がわかりますと、今度はタマラナイ空恐ろしい気持になつて来ました。

Aは度々申しました通り、冒険好きの新聞記者です。つまり普通とは違つた神経を持つていた訳ですから、人間を一人や二人、ソツと見殺しにする位のことは、何とも思わない性格の男に相違ないのですが、しかし……何しろ人跡絶えた山奥の谿谷けいこくで、水の音ばかり聞こえる寂寥境せきぱくですからね。そ

んな処で思いがけなく、奇妙な恰好をした丸裸体まるはだかの人間を一匹撃ち落したのですからね。……何ともいえない鬼気に迫られたのでしよう。四五日もかかって遡った急流激潭げきたんを、タツタ一日で走り下って、エサウシ山下の谷山別荘に帰り着くと、人知れずホットしいしい、ウイスキーを飲んで眠ったものだと思います。

ところがその翌あくる朝のこと。何かしら近所の人々の騒ぎまわる声が耳に這入ったので、何事かと思つてAが飛び起きてみると……どうでしょう。見覚えのある私の丸裸体の屍体が、自分の寝ている離れ座敷の直ぐ下の、石段の処に流れ着いているではありませんか。……その時の気味の悪かったこと……。あの石狩川の上流で、私を撃ち落した時以上のイヤな気持ちに、ゾーツと襲われたと云いますが、それはそうでしたらう。

世にも恐ろしい因縁と云えば云えるのですからね。

しかしその屍体を、そのまんま知らん顔をして見逃がすことは、流石さすがにAの好奇心が承知しませんでした。のみならず、その屍体の血色や何かが、何となく違っていることが、素人眼しろうとめにもわかりましたので、附近の者に手伝わせながら、気味わる気味わる石段の上の芝生に引き上げて、馳かけ付けて来た医者と一緒に介抱をしておりますと、そのうちに意識を回復しかけた私が、非常な高熱に浮かされながら、盛んに譫語うわごとを云い初めたものだそうです。

ところが又、その譫語のうちに、普通人にはチンプン、カンプンの囚人用語が、チョイチョイ混っているのに気が付きますと、Aは忽たちまち、今までの恐怖心理から一ペンに解放されまして、見る見る持ち前の記者本能に立ち帰ってしまったもの

だそうです。つまり是が非でも私の告白を絞り取って、有力な新聞記事だねにすべく、アラユル努力を払った訳でしたが、その苦心努力の甲斐があつて、首尾よく私が意識を回復してみますと……三度ビツクリ……案外千万にもその私が、完全に過去の記憶から絶縁されている、一種の白痴同様の人間である事がわかつた時には、ガツカリにもウンザリにも……今一度タタキ殺してやりたいくらい、腹が立つたものだそうです。

ところがサテその私が、頭や顔の手入れをして、見違えるような青年に生れ変つたのを見ますと、Aの気持が又もやガラリと一変してしまいました。……というのは外でもありません。Aはそこで、一つのステキもない巧妙な金儲けを思い付いたのでした。つまりA独特の猟奇趣味りようきと、冒険趣味とを兼ねた、一挙三得の廃物利用を考え出しましたので、そのま

まグングンと仕事を運んで行ったものでした。

谷山家の内情……特に龍代の放埒ほうちやうの底意を、ドン底まで看破みぬいておりましたAは、それから一か八かの芝居を巧みに打つて、私を谷山家の養子に嵌はめ込んでしまうと、いい加減な口実を作つて、かなりの金を龍代から絞り取つたまま、パツタリと消息を絶つてしまつたのです。

しかもこれを見た龍代は、愚かにも、スツカリ安心してしまつたものでした……というのは、つまりAが自分の註文通りに、どこか遠い処へ立去つたものと考えましたからで、こんな点では龍代も、普通の金持の子弟と同様に、お金の力を過信する傾向があつたのですね。むろん私にもそれとなく打ち明けて、万事が清算済みになつたつもりでいたらしいのですが、これが豈計あにはからんやの思いきやでした。なかなかそれ位の

ことで諦らめ切れるAの悪魔趣味ではなかつたのです。モツトモツト大きく、私共夫婦を中心とする谷山家の全体を、地獄のドン底に落ちる迄絞り上げながら、高見たかみの見物をしてやろうという、その準備計画のために、ホンの暫くの間、姿を晦くらましていたものに過ぎませんでした。

Aは先ず、彼の記憶に残っている私の言葉の九州訛なまりと、囚人用語との二つの手掛りを目標にして、探索の歩を進むべく、とりあえず小樽タイムスを飛び出して、九州北部の大都会、福岡市の片隅に在る小さな新聞社に就職しました。そうしてそこを中心にした同県下の警察や、新聞社方面に就いて、私の年齢に相当した前科者や、失踪者の名前を根気よく探してまわつたのですが、そのうちに偶然にも、福岡市の某大新



聞社に保存して在る、六七年前の新聞の綴込みの中から「青年刺客しかく」という大活字を添えた、私ソックリの大きな写真版を発見した時のAの驚ろきと喜びはドンナでしたらう。ほかの新聞に出ていた囚人姿や、学生姿の写真が皆、私に似てもにつ肖付かぬ朦朧もうろう写真であつたのに、タッタ一つその紙面にだけ掲載されていた、私の少年時代の浴衣ゆかたがけのソレが現在の私に酷似していたことは何という奇蹟でしたらう。

しかもそこまでわかるとAの仕事は最早もはや、半分以上片付いたようなものでした。その社の整理係の連中に知れないように、精巧な写真機を担かつぎ込んで、その紙面ばかりでなく、私の生い立ちや、脱獄の記事を満載した紙面までも残らず複写して、一直線に北海道に帰つて来ましたAは、その後の私の動静を、詳細に互むたつて探りまわつた序ついでに、二人の間に愛の結

晶が出来かけている事実まで、透かさずキャッチしてしま  
ますと、なおも最後の脅迫材料を掴むべく、もう一度、極  
秘密の裡うちに、石狩川の上流を探検に出かけたものです。

彼はモウその時には、旭岳の斜面の一軒家が、私の棲家で  
あったことを確信していたものでしょう。ですからそこまで  
突込んで、何かしら動きの取れない材料を掴んだ上で、今の  
新聞紙面か何かと一緒に、私へ突付ける心算つもりだったのでし  
う。

ところがそこまではAの着眼が百二十パーセントに的中し  
ていたのですから、先ず先ず大成功と云つてもよかつたので  
すが、それから先がどうもイケませんでした。

……というのは外でもありません。流石さすがに悪魔式の明敏な  
アタマを持つておりましたAも、ここで一つの小さな……実は

極めて重大な手落ておちをしてしている事に、気が付かないでいるのでした。すなわち樺戸に訪ねて来ました、女給の久美子の行衛ゆくえについて、深い考慮を払っていなかったことで、つまり久美子のああした行動は、テツキリ活動屋の宣伝に使われたものとばかり考えていたのです。そうして久美子自身は、新聞記事と一所に音も香かもなく消え失せたものと、信じ切っていたのですね。これは要するにAの頭が、アンマリ冴え過ぎていたところから起った間違いでしたが、しかもそのお蔭で折角のAの計画が実に意外とも、ノンセンスとも云いようの無い、悲惨な結果に陥ることになったのです。

それから約一箇月ばかり経った、秋の初めのことでした。骸骨のように瘦やせこけた身体からだに、ボロボロの登山服を纏まとう

て、メチャメチャに壊れたカメラを首に引っかけた、乞食然たる男の姿が、ヒョッコリ旭川の町に現われて、何やら訳のわからない事を口走りながら、ウロウロし初めました。その男はヒドイ紫外線か、雪ヤケにかかったらしい、泥のような青黒い顔をしておりまして、そのボツクリと凹へこんだ眼窩がんかの奥から、白眼をギラギラと輝やかし、木の皮や、草の根の汁で染まつた黄きん金色の歯をガツガツと鳴らしながら、川を渡るような足取で、ヒョロリヒョロリと往来を歩いているという、世にもモノスゴイ風ふう付きでしたが、更にモットモット不思議な事には、その男の凹へこんだ眼の底に、裸体か、もしくは裸体に近い女の姿がチラリとでも映ると、それが絵であろうと、実物であろうと見境みさかいは無い。破れ千切ちぎれた登山靴を宙に飛ばして、逃げ出して行くのでした。そうして知らない家うちでも、

自働電話でも何でも構わない。行きなり放題に飛込んで、救たすけを求めるかと思うと、進行中の電車や汽車に飛び乗りかけて、跳ね飛ばされたりするので、トテモ剣呑けんのんで仕様がないです。……ええ……そうなんです。近頃は方々の店先に裸体画が殖ふえて来ましたからね。おまけに秋口といつても、旭川の日中はまだ相当暑いのですからね。何でもソレらしいものを見さえすれば、絵葉書屋の前だろうが、川の中の洗濯女だろうが見境いは無い。又は一里先だろうが鼻の先だろうがおなじこと。悲鳴をあげて狂い出すのでトウトウ旭川の町中の大評判になつてしまいました。

ところがそのうちに、そのエロ狂の骸骨男が、ドウ戸惑いをしたものか、旭川の警察署へ飛び込んで、保護を受けるようになりますと、世間は又広いもので、意外にもその骸骨男

を引取りたいという、篤志家とくしかが現われて来ました。

その篤志家というのは、東京の目黒に在る精神病院の副院長で、その当時旭川に帰省していた、何とかいう富豪の医学士でしたが、その骸骨男……すなわちAの事を書いた新聞記事の切抜を持つて、旭川署に出頭しますと、自分の研究材料としてAの身柄を引取りたい旨むねを、恭うやうやしく申出たものだそうです。もつとも最初のうちにAの精神状態を、新聞記事によって判断したその医者は、極めて著明な色情倒錯と思っていたそうで、ステキに珍しい実例として、論文の材料にするつもりだったそうですが……ちようど又、警察でも願ったり叶かなったりのところだったので、厄払いのつもりで、よく調べもせず引渡したものだそうですが……そうなるそこは流石さすがに専門家だけあって、催眠術や、鎮静剤を巧みに使い分けながら、

無事に東京まで連れて来て、自分の受持の病室に、首尾よくAを監禁してしまいました。そうして半年ばかり経過するうちに、栄養が十分に付いて来て、云う事がイクラカ筋立つて来た頃を見計みはからつて、なだめつ賺すかしつしながら色々事情を聞き訊ただしてみますと……色情倒錯どころの騒ぎではない。大變な事実をAは喋舌しゃべり初めたのです。

Aはその副院長の前で、谷山家の秘密を洗い潔ぎらいサラケ出したばかりでなく、自分の発狂の真原因までも思い出して、アツサリ白状してしまつたのでした。

Aは石狩川の上流を探検して、千辛万苦の末に、ようようの事で旭岳の麓の私の留守宅を探し当てたのです。そうして最早もはや、スツカリ原始生活に慣れ切っている久美子と、四人の子

供達が、澄み切った真夏の太陽の下で、丸裸体まるはだかのまま遊び戯たわむれている姿を、そこいらのトド松の蔭から、心ゆくまで垣間見かいまた訳ですが、その時のAの驚きはドンなでしたらう。夢にも想像し得なかつた神秘的な光景に接して、開いた口が塞ふさがらなかつた事でしょう……のみならずそこでヤット一切の事情を呑み込んだAは、懐中していた新聞紙面の複写の中に在る久美子の写真と、実物とを引き合わせてみた時の喜びは又ド  
ンナでしたらう。これこそ谷山家の一切合財を、地獄のドン底まで突き落すに足る大発見と思つて、胸を轟とどろかしたに違いありません。……その時まではまだ龍代が自殺していなかつた筈ですからね……。

けれどもAはここで又、第二段の失策に足を踏みかけていることに気付きませんでした。つまりAはそこで、久美子と



子供達の写真を、何枚か撮っただけで、一先<sup>ひとま</sup>ず探険を切上げて来ればよかったのですが、そうしなかつたのがAの運の尽きでした。……もつともそのような、エロともグロとも形容の出来ないスバラシイ情景を、遠くから眺めたまま引返すというようなことは、新聞記者根性のAにとって絶対に不可能な事だったかも知れません。或はそのエロ・グロの女主人公<sup>ヒロイン</sup>に対して、A一流の冷酷な野心を起したものかも知れませんが、とにかく吸い寄せられるようにフラフラとなったAは、吾<sup>わ</sup>れ知らず熊笹を押し分けながら、その方向に近付いて行つたものです。

すると間もなく大変な事が起りました。

永い間、男気無しのまま、人跡絶えたモノスゴイ山奥に、原始生活をして来た気の強い女……ことにタツタ一人でアラユ

ル飢寒と戦いながら、四人もの子供を育てて来た母性が、如何ひようかんに慄悍狂暴な性格に変化するものかという事実は、普通人のチョツと想像の及ばないところでしょう。……まして況いわんやです。ずっと以前に石狩川の方角で、二三発の銃声が聞えて以来、パツタリと影を消してしまった自分の夫を、監獄からの追跡者に殺されたものとばかり思い込んでいた妻の久美子かつが、カーキ色の登山服に、ライフルを担いだAの姿をチラリと見るや否や、おなじ監獄からの追跡者と早合点したのは無理もない話でしょう。……何の気もなく五連発の旋条銃ライフルを担いで、フキやイタドリの深草を潜りながら、一軒屋に近付いて行つたAは、背後から不意打に、猛獣みたような者に飛び付かれたので、アツト思う間もなく飛び退のいてみると、そこにはタツタ今奪い取つたばかりの旋条銃ライフルを構えた、全裸体まるはだかの

女が、物凄い見幕で立ちはだかっている。幸いにして引金の  
転把テンパが上がっていなかった。ので、ダムダム弾の連発を喰らわ  
される事だけは助かった訳ですが、それにしても女の見幕の  
恐ろしさには、流石さすがのAも震え上ったのでしよう。女が転把テンパ  
の上げ方を知らないで、間誤まごまご間誤まごまごしている隙すきを狙って、一足  
飛びに逃げのくと、あとから銃身を逆手に振上げた女が、阿修  
羅のように髪を逆立さかだてて逐蒐おいかけて来る。その恐ろしさ……道  
もわからない藪やぶ置だたみや、高草の中を生命いのち限りの思いで逃げ出し  
て行つても、相手はソナ処ところに慣れ切つている半野生化した  
女ですから、それこそ飛ぶような早さです。おまけにドウし  
てもAをタタキ倒して、息の根を止めなければならぬ。……  
子供の安全を計らなければならぬと思ひ詰めた、母性愛の半  
狂乱で飛びかかつて来るのですからたまりません。

息も絶え絶えのまま野を渡り山を越えて、方角も何も判然  
らなくなつてしまつても、まだザワザワと追いかけて来る音  
がする……と思ううちに思いもかけぬ横あいから、銃身を振  
り翳した裸体女が、ハヤテのように飛び出して来る。驚いて  
崖から転がり落ちると、女も続いてムササビのように飛び降  
りる。小川を躍り越せば女も飛び越す。それが男よりもズツ  
ト敏捷で、向不見と来ているのですから、Aはイヨイヨ仰天  
して、悲鳴を揚げながら逃げ迷う。その中に日暮れ方になる  
と、女はヤット転把の上げ方を会得したらしく、数十間うし  
ろから立て続けに二三発撃ち出しましたが、その最後の一発  
が思いがけなく、Aの帽子を弾ね飛ばしたのでイヨイヨ肝魂  
も身に添わなくなつたAは、それこそ死に物狂いの無我夢中  
になつて、夜となく昼となく裸体女の幻影に脅やかされなが

ら、人跡未踏の高原地をさまよい初めました。

日が暮れて、夜が明けても、まだ女が追掛けて来るらしい

風の音が、四方八方に聞こえる。息も絶々たえだえに疲れて打ち倒れ

ても、睡るとすぐにライフルの音が聞えたり、女の乱髪が顔

を撫でたりする。そこで又も、夢うつつのまま起き上って、

青天井や星空の下をよろめきまわるといふ、世にも哀れな状

態になってしまいました。そうしてどこを、ドウ抜けて来た

ものか野垂死のたれじにもせず、生きた木乃伊ミイラと同様の浅ましい姿で、

旭川の町にさまよい出ると、裸体女が眼に付くたんびに飛び

上って悲鳴をあげる。そうかと思うとどこへでも駈け込んで、

「……………夕……………大変だ……………谷山家の重大秘密だ……………二重結婚

だ……………脱獄囚の妻だ……………天女の姿をした猛獣だ……………」

なぞとアラレもない事を口走るようになった……………というの

がAの発狂の真相だったのです。

……とここでこの真相を聞き出した今の精神病院の副院長は、最初のうち半信半疑だったと申しますが、それは当然の事だったでしょう。初めから終い<sup>しま</sup>まで非常識を通り越した事実ばかりですからね。……しかも念のために病院に保管して在ったAのボロボロの登山服を調べてみると……ドウでしょう。Aの言葉が一言一句、真実に相違ない事を証明するに十分な、畑中昌夫と谷山秀麿の戸籍謄本や、新聞紙面の複写フィルムを、内ポケットから探し出したばかりでなく、メチャメチャに壊れたAのカメラの中に、タッタ一枚無事に残っていた、私の妻子のグロ写真を現像する事にまで成功したではありませんか。

副院長はそこで初めて、Aの精神異常の回復が、谷山家の

重大問題となるであろう事実<sup>に</sup>気が付いたものでした。そこで早速、私に宛てた至急親展で、事のアラマシを通知して、事実かどうかを問い合わせて来た訳ですが、その手紙を受取った時には私も、思わずシインとなりましたよ。

むろんその手紙には、学術研究のために問合せるのだから、<sup>たとえ</sup>仮令事実であつても絶対秘密にする……云々という<sup>おつてがき</sup>追而書が添えてありましたし、問題の龍代も、最早トツクにお位牌になつていた時分のことですから、私の心配も半分以下で済んだようなものでしたが、しかし、それにしても重大問題には相違無いので、取るものも取りあえず上京して目黒の精神病院を訪問してみますと……又もシインとするほど<sup>おびや</sup>脅かされたのでした。頑丈な鉄の檻の中に坐り込んでいた、患者姿のAは、とりあえず見舞いに来た私の顔を、ハッキリと記憶してい

たばかりでなく、何やら訳のわからない紙片かみきれを鉄棒の間から突出しながら、辻褄つじつまの合わない脅迫めいた文句を、私に向つて浴びせかけるではありませんか。むろんその紙片かみきれは、私の事を書いた新聞の複写か何かと思ひ込んでいたものに違い無いのですが……。

私はその複写拡大紙面の実物と、ブロマイドに焼付けられた妻子のグロ写真とを並べて、副院長の自室で見せてもらいましたが、それを見ているうちに初めて、自分の過去の記憶を電光のように呼び起す事が出来ました私は、あんまり烈しいショックを受けましたために、一時失神状態に陥つてしまつたものです。

しかし間もなく、副院長の介抱によつて正気に帰りますと、私は、すぐに非常な勇気を奮い起しまして、Aが自白した一



切の事実を確認しました上に、尚なお足りないところを詳細に、副院長の前で補足してしまいました。そうしてAの一身に關する相当の保護を依頼すると同時に、私の前身を公表するかしないかという重大な判断はタツタ一つ……副院長の自由意志に一任しまして、その旨を半狂人はんきちがひのAに詳しく云い聞かせますと、そのまま北海道に引上げてしまいました。これは申すまでもなく、万一、私の前身が公表されました場合、落付いて刑に就くべく心用意をしておくためでした。……いくら他人の秘密を預るのが商売の精神病医でも、これ程の秘密を握にぎり潰つぶすのは、容易な事であるまいと思いましたがからね。

……エッ……何ですって……。

私の話がトンチンカンですって……。

これは怪<sup>け</sup>しからん。どこがトンチンカンですか。私は立派に順序を立ててお話ししているつもりですが……。

何ですか……その新聞記者のAという男の本名は、まだ思ひ出さなかつて仰<sup>おっしや</sup>有るのですか……サア。それがまだ思ひ出せないのですが……モウジキに思ひ出すだろうと思つてゐるんですが……。

……オヤ……何故お笑いになるのですか。

へエ。ここがその目黒の病院なんですか。へエツ。それじゃA君もここに居る訳ですね。へエ——ツ。ほんとうに居るのですか。……ちつとも知らなかつた。イツタイどこに……。

エツ。……ここに居る……。

……ナ……何ですか……私がその新聞記者のAだと仰有るのですか。御冗談ばかり……私は只今も申しました通り、谷

山家の養嗣子秀磨ですが。その久美子という、猛獣天女の亭主に相違ないのですが……龍代と二重結婚をしたアノ白痴同様の……。

エッ。その秀磨……谷山家の養子になった私が、ここに入院した原因をお尋ねになるのですか。そ……それはその……その発狂当時の事ですからチョット思い出しかねるのです……。

……お笑いになっちゃ困ります。鏡なんか見なくたっていいです。自分の顔は自分でちゃんと知っております。

……ナ……ナ……何と仰有るのですか。その谷山秀磨は、今でもやはり谷山家の養子になって、盛んに事業界に活躍している。後妻には山の中から久美子を迎え出して、谷山夫人を名乗らしている……そ……それあ怪けしからんじゃないです

か……二人は今後、絶対に人間世界に帰らないと云つて、あれ程固く約束していたのに……イヤイヤ。私の想像なんかじゃないのです。事実には相違ないのです。実に……ジツに怪しからんですなあ……。

へエ。何ですつて……この副院長から与えられた暗示で、美事に過去の記憶を回復した谷山秀磨は、北海道に引返してから間もなく、副院長の誠意を籠めた手紙を受取つたので、ホット一息安心することが出来た。そうしてAの一生涯を、病院で飼殺しにしてもらうように、折返して返事を出すと、すぐにタツタ一人で極秘密の裡うちに、旭岳の麓へ久美子を迎えに行つたのですか。へエ……そこで流石さすがの猛獣天女だった久美子も、なつかしい昌夫の泪なみだながらの告白に負けてしまった。ハハア……作り飾りの無い、昌夫の純情に動かされた結果、龍

代の身代りになつて、谷山家の一粒種……龍太郎を育て上げるべく、涙ぐましい決心をした。成る程……そこで四人の子供を左右に引連れた猛獣天女が、はるばると人間世界に天降あまくだる事になつたが、それに就ては昌夫の秀磨が、思い出深い石狩川の上流から、エサウシ山下の別荘まで、人に知れないように連れ込むべく、アラユル苦心を払つたものである。いかにもねえ……それから久美子の戸籍面の届出や、子供の行儀作法のテストに至るまで、又もや惨憺さんたんたる苦心研究を積みせられたものであるが、さてそのあげく、イヨイヨ一行を谷山家に乗込ませて見ると、案ずるよりも生むが易いで、久美子の奥様振りが頗る板すこぶに付いたアザヤカナものだったので、龍代の再来という評判が立って、一躍、界隈の社交界をリードするようになつた。同時に家庭も極めて円満で、五人の子供

達にミジンの分け隔ても見せないから、将来、谷山家の秘密に気付くものは絶対に出ない見込である……だからその事に就ては、絶対に心配しなくともいいと仰有る……ナア——ンダイ。馬鹿にしやがらア……。

イヤ……アハハハハ……これあ失敗しくじった。うっかりネタを曝ばらしちゃった。

アハハハ。実はね。先生をドウかして一パイ引っかけて、マンマと首尾よく退院してくれようと思ひましてね。この間から寝ないで話の筋を考えていたんです。そうしたらツイ今サツキ尻餅しりもちを突いた拍子に、自分の経歴を思ひ出したような気がしたもんですからね。こいつあ占しめたと思つて、すぐに先生の処へ来たんですが……ハアテネ……。

俺は一体、誰の経歴を思ひ出したんだらう……自分で調べ

た他人の経歴を思い出したんじゃないか……ハテ……いけねえ  
 いけねえ。モットよく考えて来れあよかった。どこかに辻褄  
 の合わない処があつたんだ……。ヨオシ……。今度こそは……。  
 エツ。昨日きのうも僕が同じ話をしに来たんですって……。一昨日おととい  
 も……。ズツト前から何度も何度も……。アノ僕が……。へエ……。  
 だから先生の方でも、谷山さんに頼まれた通りに、繰り返し繰  
 り返しくわ詳しい事情を説明して、ヤキモキしないように云つて  
 聞かせているが、ドウしてもわからない……。僕がですか……。  
 へエ。おまけに自分の事と、他人の事とをチャンポンにして  
 考えたりするので、話がだんだんトンチンカンになつて来る。  
 だから君のアタマはタシカでない。谷山家の事なんか忘れ  
 てしまつて、モット気楽に養生しなければ、いつ退院出来る  
 かわからない……。へエ……。それあ誰のことですか……。

エッ……僕のこと……へエ。そうして貴方は……。失礼ですが、どなたですか。

エッ。副院長の助手さん……一緒に僕の心理状態を研究している……。

……ウワア……しくじったア。それじゃ何でも知っている筈だ。僕は又院長さんかと思った。院長さんなら、まだ一度も僕に会ったことがないから、もしかすると一パイ喰うかも知れないと思つたんだが……いけねえいけねえ……。

アツハツハツハツハツハツハツハツ……。

ああア——ッ。くたびれたアツ……ト……。

ねえ先生……話し賃に煙草を一本下さいな……。

……オヤア——ッ。誰も居やがらねえ……。

ここは監房の中だ……おかしいな。俺あサツキから一人で



饒舌しゃべつてたのかな……フーン……イッタイ何を饒舌しゃべつてたんだらう……。

……桐の花が、あんなに散つてやがる……。

……アツ……忘れていたツ……。

俺あ龍代に復讐するつもりだったんだ……彼女あいつは俺に肱鉄ひじてつを喰わせやがったんだ……妾わたしをオモチャにするつもり……つて冷笑しやがったんだ。だからその通りにしてやったんだ。前科者を亭主に持たして、一泡吹かしてくれようと思ったのが、間違つてコンナ事になつてしまつたんだ。あべこべに俺がキチガイ扱いされる事になつたんだ。

エエツ……コンナ篋棒べらぼうな……不公平な……。

俺あ谷山家に怨みがあるんだ。ココを出してくれ。不法監

禁だぞ畜生……ドウスルカ見ろ……龍代の阿魔<sup>あま</sup>……。出して  
くれ出してくれ出してくれくれくれ……出してくれッ……。  
出して……くれエエエ——ッ……。

キチガイ地獄

底本：「夢野久作全集 8」ちくま文庫、筑摩書房  
1992（平成 4）年 1 月 22 日第 1 刷発行

底本の親本：「冗談に殺す」春陽堂  
1933（昭和 8）年 5 月 15 日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：柴田卓治

校正：しず

2000 年 10 月 26 日公開

2006 年 3 月 15 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。